

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3370105243		
法人名	公益財団法人 林精神医学研究所		
事業所名	グループホーム ひだまりの家		
所在地	岡山市南区飽浦292		
自己評価作成日	平成29年3月10日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/33/index.php?action_kouhyou_detail_2016_022_kani=true&JigyosyoCd=3370105243-008PrefCd=33&Versi
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ライフサポート
所在地	岡山市北区南方2丁目13-1 県総合福祉・ボランティア・NPO・会館
訪問調査日	平成29年3月29日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当ホームは認知症専門病院に隣接、入居者の健康管理の面で看護師(管理者)を配置し、主治医や外来看護師など医療スタッフと共に入居者の日常生活を支えるシステム作りが出来ている。ホーム内での生活においては、入居者それぞれのペースを尊重し、心地よく過ごせる環境づくりを心がけている。入居者個人の生活歴を大切に、得意にしてきたこと、誇りにしてきたことなどを生活の中で発揮してもらえるような場面作りもやっている。入居者が外出する機会を多く持ち、社会とのつながりが希薄にならないように、買い物と一緒に出かけたり、レクリエーションを月に1回は企画するようにしている。毎月全職員参加で職場会議を開き、入居者のケアプランの内容について、各自の気づきを持ち寄り協議している。同時に業務改善やケアの質の向上のための話し合い、学習などもやっている。ホーム内の生活をより深く知ってもらうために家族、町内に向けて「ひなたぼっこ新聞」を発行している。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

今、岡山県内で認知症専門の病院と言えば即この病院と答える程、“認知症の事ならこの先生に診てもらいたい”と、厚い信頼を寄せる院長がいる母体病院に隣接するグループホーム「ひだまりの家」は、入院中の利用者からの入所希望も多く常に待機者が控えている。1ユニットのホームの中で男性利用者2名、女性利用者7名がそれぞれ個性を発揮しながら自分のペースで楽しく暮らしている。「皆さんの輪を大切にしたい。ここに来て良かった。一人じゃないから」という率直な利用者本人の言葉もあり、積極的に意見を言う人もいる。又、言える雰囲気があり職員が温かく受け止めてくれる。数年前から毎月、利用者との「寄り合い会」を開いているが、話し合った内容を記録に残して運営に反映したり、個々のケアプランにつなげている。「ISO9001認証書」を玄関に掲げ、職場作り・マネジメント力の向上に取り組みながら、利用者本位のケアを実践しているホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input checked="" type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input checked="" type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input checked="" type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input checked="" type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 <input type="radio"/> 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input checked="" type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input checked="" type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input checked="" type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input checked="" type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input checked="" type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input checked="" type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input checked="" type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input checked="" type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	<input checked="" type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	認知症の人が、その人らしく個人として尊重されながら生活していくために、事業所としてどんな支援が必要かを考えた結果の理念である。理念は全職員が毎日の勤務時に目につくよう事務所に掲示しており、入居者の生活、ケアを考える上での基礎となっている。	玄関に「ISO9001認証書」、事務所に理念が掲示してある。6月にはISOの内部監査があった。年度目標を立て、上半期と下半期、半期ごとに総括シートを作成して評価・検証している。職員の介護に対する知識・意識も高い。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の行事には、入居者と共に参加するよう心がけている。町内会や地域の保育園との交流も続けている。	保育園児の訪問時には一緒に手遊びをしたり、運動会の見学の時は敬老席が設けてあり声援をあげて応援をした。地域のイベントや町内神事の案内もある。隣接する病院の健康まつりに参加して地域の人との交流を図っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	ホームの様子を地域の方に知ってもらうために、ひなたぼっこ新聞を町内の回覧板に入れてもらっている。運営推進会議においても、情報発信を心がけている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議で、ホームの活動状況や課題などを報告し、意見交換をしている。評価の公表結果もお伝えし、公表結果を町内の回覧版にて回覧してもらっている。	今年度は運営推進会議に参加してもらいやすい16時開催にして、地域包括の参加が6回あった。その他にも町内会長・民生委員等の地域の人、病院の看護部長の参加がある。議事録の内容からも活発な意見交換の様子が確認できた。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議を通して、地域の包括支援センターの職員と情報共有を行っている。	地域包括市場分室の職員とは2ヶ月毎に会議等で情報交換や話し合いをして、ホームの活動内容もよく理解してもらっている。運営に関する事等、何かあれば市の担当者に相談して、日頃から連携をしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束、抑制ともに行っていない。身体拘束に関する指針を作成し、日頃から学習を深めている。どんな行動が抑制や拘束にあたるかを繰り返し確認をしている。	比較的軽度な人が多く、身体拘束が必要となるようなケースは無く、玄関や門扉の施錠もしていない。帰宅欲求が出た時は、本人がどうして「帰ろう」と思ったのか、原因を探り気持ちを受け止め、本人に安心してもらえる対応策を話し合っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	身体拘束と同様に、虐待についても学習の機会を持ち、見過ごされないように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	生活保護受給者も入居ができるように、指定を受けている。家族と同様に、後見人にもご本人の身上監護の部分で協力をいただいている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約や重要事項に関しては、必ず管理者が文書に加え、口頭で説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日常のことやレクリエーションへの意見を引き出せるよう、月に1回入居者と職員で寄り合い会を行い、ホームの運営に活かしている。	全体家族会を4月に開催し、病院内食堂で寿司作り、意見交換等をして家族間で交流した。家族へは行事等の写真満載のホーム通信を送付し、利用者の日頃の生活の様子を伝えている。面会時には状況報告をし、必要に応じて電話等で連絡・報告をしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月行っている職場会議にて、意見が出ることが多い。また、不定期ではあるが、法人の職員が職場会議に参加する機会も設けており、意見を反映できるようにしている。	毎月の職場会議ではケアカンファレンスや看取りについての研修、資料やDVDでの学習会等をして話し合っている。職員は勤務年数の長い人が多いが、母体法人で雇用された職員がGHに配属されるシステムになっており、最近も新規職員が1名入った。	年1回職員が業務力量チェックリストを提出し、管理者が評価している。育成面談表もあり、個別に学習会に取り組んでいく姿勢が素晴らしい。人材育成を大切にしているホームに今後も期待したい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	給与水準の引き上げ・維持にも努力している。休憩時間の確保、認知症ケアのやりがいを伝えるなど、職場環境の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内外の研修への参加の機会を作っている。年に1回は順番に法人外の研修を受ける機会を持つようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	他のグループホームとの交流はなかなか機会が持てていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居時には本人、家族、関係者からこれまでの生活歴を聞き、新しい環境においても不安が少なく過ごせるよう努めている。本人と職員の信頼関係作りが一番大事であり、職員は本人に安心を与えられる存在になるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	本人はもちろん、ご家族も新たな人間関係に不安を抱かれていますので、しっかりお話をお聞きし、関係を築くようにしています。入居前の様子や本人への思いもしっかり把握するよう努めています。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居時に必要な対応(本人の生活ペースを掴むまでは無理強いしない、医療依存の強い方がホームに馴染むまでは医師や看護師の支援を強化する、など)を全職員で共有し、対応してきている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員が本人のできること、できないことを正しく理解し、本人に適した介助のもとで本人のもつ力を活かして暮らせるようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族とのつながりが切れたり、薄くならないように、職員がパイプ役となり本人の想いを家族に伝えたり、家族の思いを本人に伝えている。本人の支えとなるのはご家族の存在が一番であり、本人のホームでの生活を一緒に支えてもらえるよう、面会や外出、レクへの参加など働きかけている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ホームの入居者と職員、隣接病院の職員などなじみの関係になっている。入居者同士がなじみの関係になれるよう、お互いの共通点を話題に職員が間に入り関係を構築している。	家族や友人等の面会があり、お菓子等の差し入れもある。家族に外に連れ出してもらいたいと願っている人の気持ちを汲んで関係の調整に努めたり、馴染みの人との関係継続や家族の絆を大切にしたい個別の支援をしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者の性格や認知症の度合いも様々であるため、重度の入居者が萎縮したり、軽度の入居者がストレスを溜め込んだりしないよう、適宜職員が間に入るように配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居後も、ホームでのケアが役立つように関係者へ情報提供している。退居者のご家族が野菜や花などを下さったりして現在でも関係が続いている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の思いや意向を日常の会話の中からキャッチするよう努めている。職員の都合で進まないよう、常に立ち止まり考えるよう努めている。	月1回の「寄り合い会」で利用者の意見や希望を拾っている。「3時のおやつ前に軽い体操をしたらどうか」「今日の予定が知りたい」等、実に様々な利用者からの提案がある。記録に残し職員間で話し合い、これまで実行してきた意見も数々ある。	利用者と職員とのミーティング「寄り合い会」は数年前から毎月行っており、利用者の率直な意見や提案が飛び交う。他に例がないくらいとても素晴らしい企画なので、今後も継続して利用者個々の思いの実現に向けて取り組んで下さい。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントが一番大切な事項であり、生活歴や生活のペース、社会で担ってきた役割など、家族だけでなく入居前に関わっていた専門職からも情報収集するよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	アセスメントが一番大切な事項であり、日常の生活の観察を通じて、入居者それぞれの変化を逃さないようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	全職員参加のケア会議において、気づきや課題などを話し合いケアプランを作成している。家族には、作成した後に説明をする機会を設け、その際に意見をいただき反映させている。	アセスメント・モニタリングを6ヶ月毎に行ない、本人・家族の意向をベースに、職員間で話し合っプランを作成している。個別計画は精神面をよく把握して役割や生きがいを持てるような具体的な支援内容になっており、心のケアをしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	職員全員が日常の観察に努め、個人記録にもその内容がしっかり記録してある。この記録がケアプラン作成の土台になっている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	システムとしての確立はできていない部分もあるが、日常の生活の中での希望やニーズに対しては、その時々柔軟に対応できている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域での行事、散歩の際の地域の方との触れ合いや地域の保育園児との交流など、地域の方々が入居者の心身に良い影響をもたらしてくれている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	隣接病院の医師がかかりつけ医となっている。隣接病院の医師とも協力しながら、本人の状態を伝え、関係を築いている。	外来受診は隣接する「ひだまりの里病院」に行っており、利用者全員、内科医がかかりつけ医となっている。月1回の歯科往診、週1回の歯科衛生士訪問衛生指導を利用の人もいる。管理者が看護師であり、医療と介護の連携がよく取れているので、安心して生活出来る。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	入居者の健康管理の面で看護師の配置あり(管理者)。また、隣接病院のかかりつけ医や外来看護師など医療スタッフと共に入居者の日常生活を支えるシステム作りが出来ている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入居者が早期に回復し退院できるよう、ホームでのケアや介護方法を医療機関に「看護添書」として情報提供している。入院後も、状態把握に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期ケアのあり方については、職員で協議もしているがご家族の協力が不可欠であり、段階に応じてご家族と話し合いの機会を持つことにしている。	母体病院が隣接しているため、今までホームでの看取りは過去1件しかないが、家族の希望があれば訪問診療専門(24時間対応)の他のクリニックと連携して今後は看取りをしようと考えており、ターミナルについてもっと具体的に学習していく予定と聞いている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時、事故発生時、感染症発生時の対応マニュアルがある。判断に迷ったときの相談体制の整備もできている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災発生時の避難訓練を定期的に行っている。運営推進会議でも議題に上げている。	年2回夜間想定避難訓練を利用者も参加して実施した。隣接の病院からの応援もあり、日頃からよく連携がとれている。立地的に児島湾が近いので水害時は隣接する4階建ての母体病院へ避難するようになっている。近隣の人との協力体制も出来ている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	自分がされたらどう感じるか、自分の親がされたらどう感じるか、常に自分たちの言動を振り返るよう、職員間で話をしている。	視覚障害や聴覚障害の利用者もいるので、本人の意向を汲み取り「わかる」コミュニケーションをしようとして努力している。リビング入り口の横にあるトイレにはカーテンをして、羞恥心への配慮やプライバシーが守られる工夫をしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	選択肢を用意し、できるだけ本人の自己決定を促すようにしている。こうしたらどうか？という提案はさせてもらっている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	こちらから手伝いをお願いする部分もあるが、お部屋でゆっくり過ごす日もあれば、居間で過ごす時間が多いなど、入居者のその日の気分で過ごしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣類は本人が選択したり、家族からの情報で本人の好みを把握している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	メニューを考える際にも、入居者の好物や旬の物の希望も取り入れている。食事作り、台拭き等、入居者が分担して役割を持ってもらっている。	外部の委託業者から献立表と昼・夕食の食材が届き、それを台所で作っているが、朝のみ夜勤明けの職員が調理している。今日の昼食のメインは鯛飯。職員が鯛の小骨を丁寧に取り除いてから利用者に提供していた。台所で野菜を切ってお手伝いしている利用者の姿もあった。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	個人に合わせた量で提供している。細かく刻む必要がある場合は個別に対応している。どんぶり物が苦手な方にはおかずとご飯に分けたり、小皿が必要な方には小皿に移したり、柄物のお皿では集中できない方には無地のお皿に盛り付けるなど、配膳にも工夫をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎朝晩の口腔ケアは丁寧に行っている。必要な方は歯科医の往診や歯科衛生士の口腔ケアが受けられるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個人の排泄サインを見逃さないようにし、トイレへ誘導している。尿意や便意が表せない場合は、個人の排泄パターンに応じてトイレの声かけや誘導を行っている。	排泄がほぼ自立の人は1名。夜間のみ紙おしめの人も1名いる。個々の排泄リズムを見ながら適宜声かけ誘導して自立支援につなげている。各トイレのドアに「便所」と書いた紙が貼ってあり、廊下の奥にあるトイレに一人で行っている人を数人見かけた。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分摂取に気をつけ、排便調整に心がけている。午前にラジオ体操等を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週2回、3人ずつ午後に入浴している。それぞれの好みの湯の温度など把握している。体制上いつでも入浴することが難しい。夜間の入浴は体制上できていない。	一般浴槽に職員と1対1で楽しく入浴している。入浴拒否の強い人には最初に風呂場まで一緒に行く悪い役(男性職員)と後で来て優しい言葉で良い役を演じる人(女性職員)というぐあいに、職員が役割分担をして上手に誘導していると聞いている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	それぞれの入眠のタイミングを大切に就寝介助をしている。早くに眠る方もいれば、テレビを楽しんでから遅めの時間に眠る方もいる。空腹で眠れない方には、少量のおやつなどを提供して、スムーズに入眠できるよう援助している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人の薬情報をファイルに綴じて、いつでも確認できるようにしている。服薬内容が変更になる際は、申し送りを行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	それぞれ得意なことをホームの中での役割として担っていただいている。料理、洗い物、メニュー書き、拭き掃除、洗濯物干し、洗濯物の取り入れなど。外食などで外へ出かける楽しみを企画している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	日曜日には食材の買い物と一緒に出かけ、おやつや化粧品を購入したりしている。スーパーで店員さんや買い物客とのふれあひも入居者に良い影響となっている。	行楽の季節には花見や紅葉見学に行ったり、外食レクでは家族も参加して回転寿司店に外食へ行く等、楽しみの持てる企画をして外出支援をしている。本人の希望に添った買い物等の個別の支援もしている。ホーム周辺は自然が残っていて、気軽に出かけている散歩は良い気分転換になっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在は、全員ホームで金銭管理をしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族への電話や手紙のやりとりなど、支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	個人によって、刺激になるものが違うため配慮が難しい場合もあるが、不快・混乱が起きないように配慮している。	リビングから広いウッドデッキに出られ、天気の良い日はティータイムの場となる。広い畳の間もあり、仲良し同士がソファに座ってテレビを見ている。「みんなの作品集」コーナーにはお雛様のぬり絵や折り紙が展示され、隣のホワイトボードには今日のメニューが書き込まれている。利用者の歌声が響く明るいリビングだった。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂・居間では、それぞれ自分の居場所となる定位置を持っており、思い思いに過ごしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅から使い慣れたタンスや椅子、ラジカセを持参されていたり、好みの色や柄のシーツ類を用意するなど、居心地よい空間にできるよう努力している。	洋室と和室があり、各居室に洗面所が設置されている。自室でゆっくり好きなテレビ番組を楽しむ人、愛読書・週刊誌等を置いている人、精神的に落ち着くからと仏壇を持ち込んでいる人もいる。温湿度計・加湿器等を置き、室内環境に配慮した過ごしやすい部屋になっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	「トイレ」ではなく「便所」という言葉を使うなど、ひとりひとりの認知に働きかけるアプローチを模索し、実行している。		